

優秀賞

## お雑煮担当

新潟市立高志中等教育学校 3年 小林 蒼空

去年の正月から、私はお雑煮担当になった。今までは、親戚が祖母母宅に集まる元旦の朝に、祖母が作ってくれた雑煮を食べていた。そこにいる全員が祖母の作ったお雑煮が大好きで、毎年楽しみにしていた。

しかし祖母は、私が中学生になってから急激に物忘れが酷くなっていた。私は毎日祖母の家に寄っていたのだが、部活や勉強で忙しくなり、話す時間が短くなったことも原因の一つだと思う。祖父が病院に連れて行き、医師から告げられた祖母の病名は「認知症」だった。

料理上手だった祖母は段々と料理をする機会が減り、祖母母宅の夕食はスーパーで買った弁当や惣菜がほとんどになっていった。

元旦の二日前。私が祖母の家を訪ねると、こたつに入っのんびりとテレビを眺めていた。毎年祖母は、十二月三十日にはお雑煮の準備を始めていたのだが、その日は何も準備はされていなかった。私が、お雑煮は明日作るのかと祖母に尋ねると、きよとんとした顔をして、

「なんのこと？」

と尋ね返してきた。祖母は完全に、毎年この時期にお雑煮を作っていたことを忘れてしまったらしい。しかし、みんなの毎年の楽しみであるお雑煮がない元旦はあまりに寂しいので、私が祖母の代わりにお雑煮を作ることにした。私は、できるだけ祖母の味に近づけるため、味や材料を思い出し、何度も味見や調整を繰り返して完成させた。

元旦の朝、親戚達の反応がとても不安だったが、何度も「美味しい」と言いながらお雑煮を食べてくれた。

食器を片付けていると、祖父から、

「ぼあちゃんの雑煮を受け継いで作ってくれてありがとう。」

と、感謝の言葉を言われた。その時私は、この先もお雑煮担当として、祖母の雑煮の味をつないでいこう、と心に誓った。